

〔東雅^{二十}〕蝶テフ 字の音をもて呼也

〔倭訓栞^{前編十七}〕てふ 蝶をよむは音なり、相摸下野陸奥にてふま、津輕にかにべ、又てこな、秋田にへらこ、越後にてふまべつたら、信濃にあまびらといふかひこのてふは蛾なり、信濃陸奥上野にひるといふ西國にひるろうと云、伊勢にひいろといふ、柳女郎と呼者あり、水蝶也、粉蝶を放ちて其止る所に隨て幸なるは唐明皇の故事なり、天寶遺事に見ゆてふく、とまれ、菜の花にとまれ、なれもとまらば、我もとまらんといへる童謡は古意を得たり、

〔重修本草綱目啓蒙^{二十七}〕蛺蝶 テフ カラテフ 古歌 チヨテフ 京 テフ 江戸 テフコ

阿州 カツカベ 南部 テイコウナ 津輕 テコナ カ、ベ 共同 ハヘル 琉球 テフマベツ
トウ 越後 アマビラ 信州 カハビラコ テフ 野州 ヘラコ 秋田 中略

蛺蝶ハ春夏秋ノ間飛翔シ、草木ノ花ヲ吸フ、菜花上殊ニ多ク集ル、一身四翅、翅ノ大サ八九分ニシ

テ粉アリ、色白キ者ヲ粉蝶泉州志ト云、色黄ナル者ヲ黄蝶同上ト云、又黒ヲ雜ルアリ、皆油菜葉ノ上或

下ニ織小ノ黄卵ヲ生ズ、數日ノ後化シテ小長蟲トナル、略

〔古今要覽稿^{蟲介}〕てふ 蝶

てふ、一名をこてふ、古名をかはらひこといひ、俗稱をてふく、といひ、中略漢名のごときも數名ありと雖も、通名は蝴蝶といひ、蛺蝶といひ、蠶蝶といひ、蠶ともいへり、説文によるに、蝶は俗字のよしにて、蠶を本字となせり、然れ共、古來より蝶字を以て通用したり、又雅名の如きは、春駒といひ、野織といひ、撻抹といひ、探花使といひ、或は探花使共、探花子とも目せるは、名義皆同じくして、いはゆる蝴蝶の花に遊ぶとも、花に戯るなど、ふるくより詩歌に詠せるよりして、まか名付そめけん、又戀花といふ目もあるは、もと蝶は花木花草中の毛蟲尺蠖の類、或は蠶蠶の諸蟲老時に至りて、おのく脱して蝶となる也、略 中また此物大小あり、大なるものは蝙蝠の如く、故に蝙蝠蝶